

短期大学における英語教育活動

中島 直樹

1. はじめに

平成 23 年 4 月、城西短期大学において英語力調査が実施され、外国人留学生を除く 57 名の短期大学ビジネス総合学科新生が受験した。近年、短大を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語学力低下の傾向は年々顕著になり、特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から、新入生全員に対して毎年英語力調査を実施しており、その調査結果を基に、坂戸キャンパスの一年次の必修科目である TOEIC イングリッシュ I A・I B (TOEIC のリスニングに重点を置いた演習) と TOEIC イングリッシュ I C・I D (TOEIC のリーディングに重点を置いた演習) を能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に、一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて、12 月に本学で実施された TOEIC テストのスコアも比較・検討し、今年度新入生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

2. 過去 9 年間の英語力調査の結果を振り返って

はじめに、平成 14 年度の英語力調査から振り返ってみたい。英語力調査自体は平成 12 年度から実施されていたが、難易度の高い問題であったため、平成 14 年度に基礎力を重視した試験問題を新たに採用し、それを今も継続して使用している。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は 1 時間、全 50 問で 100 点満点の試験であった。93 名が受験し、全体の平均点は約 56.9 点

であった。学科別の受験者数と平均点は表1の通りである。

表1 平成14年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現代文化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

実際の得点分布を見てみると、かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60点から74点までの上位の層(26名)と45点から59点までの中位の層(24名)と30点から44点までの下位の層(20名)とにおおよそ分類でき、この3つの層が平成14年度的女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に、平成15年度の結果について見てみたい。59名の新生全員が受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 平成15年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現代文化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

平成14年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がった。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

得点分布グラフの形にある程度の変化は見られたが、基本的には14年度とそれほど変わってはいなかった。14年度と違う点は、90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった(14年度は6名)ことと、中間層の領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの中間層にはいくつかの山があったことが14年度の英語力調査の検証で分かっていた。そして、14年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生

数も多かったが、平成15年度は上位の層に16名、中位の層に17名、下位の層に17名と、中間よりやや下に比重が移っていた。

次に、平成16年度の結果について検討したい。43名の新生が受験し、全体の平均点は約50.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表3の通りである。

表3 平成16年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33名	約50.5点
現代文化	10名	約50.4点
全 体	43名	約50.5点

平成15年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては4.5点、現代文化学科においては2.2点、全体では4.0点下がった。平成14年度から下降の一途をたどっていて、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示す結果となっていた。この傾向はデータを採りはじめた平成12年度からずっと続いていた。

全体の得点分布は基本的には15年度とそれほど変わっておらず、15年度をほぼ継承していた。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも、中間層の形が逆転したことも15年度と同様であった。それに加えて、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が5名となり、前年より3名減少してしまった。中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に13名の学生がいた。平成14年度までは、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成15年度から中下位に比重が移り、その傾向は平成16年度も続いていた。

次に、平成17年度の結果について検討したい。80名が受験し、全体の平均点は約56.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表4の通りである。

表4 平成17年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57名	約56.9点
現代文化	23名	約55.5点
全 体	80名	約56.5点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては6.4点、現代文化学科においては5.1点、短大全体では6.0点上昇した。平成12年度から短大入学生の英語力調査のデータを採っ

ているが、前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。数値的に見て、平成14年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても、短大全体では6.0点も平均点が増えたので、まったく異なった形になった。90点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が本学を引っ張る牽引的存在になっていた。受験者数が80名なので、約4人に1人がここに属していたことになり、この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は16年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。16年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、17年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。平成15年度から中下位に比重が移ってきていて、平均点を下げる最大の理由となっていたが、17年度になってようやくその流れが変わった。

次に、平成18年度の結果について検討したい。82名が受験し、全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

表5 平成18年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

この年度に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、17年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。17年度にいったん上昇に転じたが、18年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。

全体の得点分布を見てみると、受験者数は前年とほぼ同数であったにもかかわらず、グラフの形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、前年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが、18年度はその層には6名しかいなかった。ピークは40～44点のところであり、16名が集中していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いたが、この層に関しては、前年の6名と大差がないと考えてよいであろう。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様であった。中間層の上位の層には15名おり、前年の18名と大差はなかった。しかし、中位の層は前年の16名から7名増の23名、下位の層は21名から8名増の29名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目についた。つまり、75点から89

点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度でもあり、高校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、18年度はその層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を8.2点下げている最大の原因であった。

次に、平成19年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表6である。

表6 平成19年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約51.0点

ビジネス総合学科になって2回目の英語力調査であったが、前年度の平均点約48.3点から2.7点上昇の約51.0点となった。前年度と比べ、平均点が若干上昇したため得点分布グラフの形にわずかな変化が見られたが、特に大きな変化はなかった。得点のより低い層により多くの学生が集中するというそれまでの傾向を継承していたと言ってよいであろう。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に12人、45点から59点までを中位の層に18人、30点から44点までを下位の層に22人となっており、それまで通り基礎力のない学生の多さが目立っていた。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は、前年の6名から11名に増加していた。ピークは18年度は40～44点のところであったが、19年度は50～54点に移動しており、これらが19年度の英語力調査の明るい材料であった。

次に、平成20年度の結果について検討したい。受験者数81名、全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表7である。

表7 平成20年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81名	約51.0点

受験者数は12名増加、平均点は前年とほぼ同じであった。だが、前年度と比べ、得点分布グラフの形はわずかに異なっていた。ピークは50～54点と40～44点のところであり、いずれも10名。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に15人、45点から59点までを中位の層に23人、30点から44点までを下位の層に22人となっており、中位の層が下位の層を1名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾向は変わっていなかったが、中位の層が増加したことはよい材料であった。85～89点の層

に5名、90点以上はかなり基礎力のある学生が2名いたことも喜ばしいことであったが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が11名（昨年は6名）おり、平均点が上がらない原因になっていた。かなりできる学生もいたが、それと同数のまったくできない学生もいて、平均すると昨年並みであった。

次に、平成21年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約46.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表8である。

表8 平成21年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約46.0点

受験者数は12名減少、平均点は前年と比べ5点マイナスであった。得点分布グラフの形も当然異なっていた。前年度のピークは50～54点と40～44点のところ（いずれも10名）にあったが、21年度は30～34点のところの下がってきており、12名の学生がここにいた。また、第2のピークもその前後の40～44点と20～24点にあり、低得点層の膨らみが目立っていた。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に14人、45点から59点までの中位の層に14人、30点から44点までの下位の層に24人となっており、やはり下位の層の占める割合が多かった。29点以下のほとんど基礎力のない学生も12名おり、前年と同様に、この層が平均点を大きく押し下げている。90点以上はかなり基礎力のある学生が2名（内1名は留学経験者）いたことが唯一の明るい材料であった。

最後に、平成22年度の結果について検討したい。受験者数81名、全体の平均点は約53.5点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表9である。

表9 平成22年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81名	約53.5点

受験者数は12名増加、平均点は前年と比べ7.5点上昇であった。前年と比べて平均点が上昇した年は過去には平成17年度のみであったので、これが二度目ということになる。7.5点の上昇は17年度の6.0点を上回っていた。平成17年度は奨学金制度を充実させ、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。しかし22年度は17年度のような奨学金制度はなかったが、大きく平均点が上昇した。その原動力となったのが3月の入試で入学した学生達であった。彼らのほとんどが城西大学やその他4年制大学の受験に失敗し、第二希望で短大に入学した。一度は受験勉

強をやった実績と短大卒業後に編入したいという気持ちを持ち合わせた彼らが平均点を押し上げたのだと思う。それまでの短大入学生はいわゆる受験というものを経験しないで入学することが多かった。そのような状況の中で、22年度は受験に失敗した者たちが新しい風を吹かせてくれた。グラフの形を見てみると、前年度のピークは30～34点のところであり、12名の学生がそこにいた。また、第2のピークもその前後の40～44点と20～24点にあり、低得点層の膨らみが目立っていた。22年度のピークは50～54点と40～44点のところの上がってきていて、10名の学生がここにいた。第2のピークは下方30～34点のところ（前年度のピーク）に9名いたが、70～74点に7名、60～64点に6名、両ピーク間の45～49点に6名おり、前年の下膨れした形とは明らかに違っていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は前年の12名から8名に減っていた。90点以上はかなり基礎力のある学生は4名おり、前年より2名増えていた。

3. 今年度の結果について

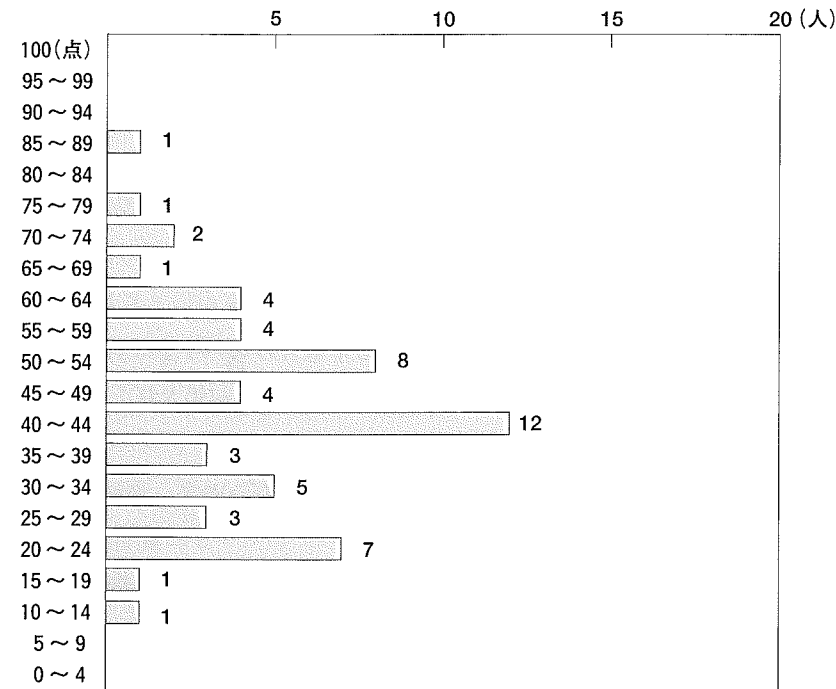
今年度もこれまでと同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。外国人留学生を除く57名が受験し、全体の平均点は約43.7点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表10である。

表10 平成23年度英語力調査結果（4月実施）

学科	受験者数	平均点
ビジネス総合	57名	約43.7点

受験者数は24名減少、平均点は前年と比べ9.8点下落であった。受験者数は大幅減、平均点も調査を始めて以来過去最低、下げ幅も過去最大であった。昨年7.5点上昇し、今年度が注目されたが、このような残念な結果になってしまった。過去に平均点が前年より上昇した年度は17年度と22年度の二度であったが、いずれも翌年には大きく平均点を下げている。特に今回の下げ幅は大きく、18年度の8.2点下落を大きく上回っている。平成17年度は、奨学金制度を充実させ、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。また22年度は、受験勉強を経験したけれども4年制大学の受験に失敗して短大に第2希望で入学したが、短大卒業後に4年制大学に編入したいと強く思う学生が平均点を押し上げた。このように考えてみると、17年度と22年度の2年だけが例外なのであって、短大入学者の英語基礎力は年々著しく下がっていると言わざるをえない。毎年、TOEICのスコアアップを目指して授業を行っているが、今後もこのような状況が続けば、もはやTOEIC云々のレベルではなくなると思う。得点分布グラフの形は以下の様になっている。

平成 23 年度英語力調査結果得点分布グラフ (4 月実施)



昨年度のピークは 50～54 点と 40～44 点のところにあり、10 名の学生がここにいた。第 2 のピークは下方 30～34 点のところに 9 名いたが、70～74 点に 7 名、60～64 点に 6 名、両ピーク間の 45～49 点に 6 名おり、それ以前の下膨れした形とは明らかに違っていた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 8 名、90 点以上のかなり基礎力のある学生は 4 名であった。今年度のピークは 40～44 点のところにあり、12 名の学生がここにいて。第 2 のピークは 50～54 点のところに 8 名いるが、1 名少ない 7 名の学生が 20～24 点のところにおいて第 3 のピークを形成している。90 点以上のかなり基礎力のある学生はいなくなり、最高点は 86 点、次点は 78 点であった。グラフの形も以前の下膨れした形にもどってしまった。39 点以下の学生が 20 名もおり、それが全体の 35 パーセント以上を占めるという散々な結果であった。

4. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題や低かった問題等について特に気づいた点を検証していきたい。

まず、最も正解率の高かった問題は 4 番であり、正解率は 77.1% であった。

(4) There are many () of food from all over the world in this store.

1. chances 2. jobs 3. trips 4. kinds

次に正解率の高かった問題は 10 番であり、正解率は 75.4% であった。

(10) A: I don't know () Central Park is.

B: It's not far. I'll show you.

1. who 2. when 3. where 4. whose

正解率が 70% を越えたのは以上の 2 題のみであった。昨年は、正解率が 80% を越えたのは 2 番、37 番、10 番の 3 題であったので、今年度のレベルがいかに低いかがよく分かる。

3 番目に正解率の高かった問題は 1 番と 2 番であり、正解率は共に 68.4% であった。

(1) A: Do you know what language is () in Mexico?

B: Yes. It's Spanish.

1. thrown 2. lent 3. spoken 4. told

(2) A: Excuse me. Can you tell me the way to the post office?

B: Sure. () straight down the street. It's on the right.

1. Break 2. Catch 3. Go 4. Put

反対に、最も正解率の低かった問題は 3 6 番であった。

(36) A: Can you visit our farm in Canada this summer, Ken?

B: ()

1. Yes, it's mine 2. No, I haven't
3. No. There's a farm. 4. Sure. I'd love to.

半数以上の学生が 3 を選択していた。I'd love to の後に省略があることを理解できた学生は僅か 12.2% であった。

次に正解率の低かった問題は 18 番であった。

(18) If it () tomorrow, I'll probably stay home and read.

1. rainy 2. rains 3. raining 4. to rain

正解率は 17.5% であった。半数近くが 1 を選んでいた。be 動詞がないのに主語 it の後ろに直接形容詞をつなげたり、ing 形を続けたりする基礎力不足が目立つのは毎年同じ傾向である。

次に正解率の低かった問題は 6 番であった。

(6) A: This is a report () I wrote in Japanese yesterday.

Could you check it for me, Jiro?

B: OK, Laura.

1. which 2. when 3. who 4. whose

半数以上の学生が 2 を選択していた。関係代名詞の基礎を理解できていないことがよく分かる。

正解率は 22.8%であった。

1 番から 35 番までは基本的な文法・語法、36 番から 40 番までは会話、41 番から 50 番までは日常的な作文の力を見る出題をした。どの問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題したが、今年の学生は例年と比べて非常に出来が悪かった。基本的な文法・語法が弱く、中学校レベルでつまづいている学生がかなり多いという現状が明らかになっている。

5. 1 月実施の英語力調査および TOEIC テストの結果について

これまで、4 月に実施された英語力調査を基にして、今年度の学生の英語力を分析してきたが、1 月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し、どの程度スコアが伸びたかを調査した。第 1 回目（4 月実施）と第 2 回目（1 月実施）のテストの平均点と得点差をまとめたものが表 11 である。

表 11 英語力調査結果比較

第 1 回目	第 2 回目	得点差
約 43.7 点	約 48.4 点	プラス 4.7 点

第 2 回目（1 月）は 53 名が受験し、平均点は 48.4 点で、第 1 回目より 4.7 点上昇した。過去 3 年間の得点差推移を見てみると、20 年度はプラス 1.7 点、21 年度はプラス 4 点、22 年度はプラス 3.8 点となっており、今年度のプラス 4.7 点はここ数年の中で最大の上げ幅であり、かなり満足できる数字であると思う。29 点以下のほとんど基礎力のない学生も 12 名から 5 名に減っており、90 点以上の学生も 1 名いた。グラフの形も得点中位の層が多くなる形に修正されている。

また、今年度も、12 月に本学で実施された第 4 回 TOEIC IP テストや外部の TOEIC テストを受験するように指導し、短大 1 年生 47 名が受験した。全学との比較は次の表 12 の通りである。

表 12 第 4 回 TOEIC IP テスト結果

学 部	受験者数	平均点
短 大	47 名	225.6 点
全学（短大含む）	284 名	299.4 点

短大を含む全学で 284 名が受験し、平均点は 299.4 点であった。短大の平均点は 225.6 点であり、昨年の平均点を 21.9 点下回っている。短大の最高点は 530 点（外部受験：2 年生）、300 点

以上の学生は 5 名（外部受験含む）であった。TOEIC400 点を目標して授業をやってきたが、今年度も目標を達成することができた。

6. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。平成 14 年度からの全体の平均点の推移を見てみると、14 年度：56.9 点、15 年度：54.5 点、16 年度：50.5 点と年々下降の一途をたどり、17 年度に 56.5 点といったん上昇に転じたが、18 年度に 48.3 点と大きく下げ、19 年度：51.0 点、20 年度も 51.0 点と戻したが、21 年度は 46.0 点と下げ、22 年度は 53.5 点と大きく上昇したが、今年度は 43.7 点と過去最低になった。評定平均値の高い学生が多く入学した平成 17 年度と、短大第 2 希望入学者など勉学意欲が高い学生が多く入学した平成 22 年度を除いて、平均点は段階的に年々低下していると思われるであろう。この程度の試験で平均点が 43.7 点ということは、ほとんどの学生が中学レベルの基礎力がないということである。来年度に向けて特に明るい材料もなく、更に下がる可能性もあろう。こうなれば、もはや TOEIC レベルの話ではない。とは言え、短大で 1 年間基礎をしっかりと学んだ者は着実に実力アップを果たしている。数字にもはっきり表れている。我々にできることは、たえず基礎を確認しながら授業を行い、全体的な底上げをすることだと思う。また同時に、ある程度基礎力のある学生に対して更に実力を伸ばせるような指導方法も求められていると思う。